

## 2. 東近江市勝堂古墳群の再検討（1）

藤川聖起・横白彩江・大倉響稀

### 1. はじめに

東近江市に位置する勝堂古墳群は、古墳時代後・終末期に築かれた滋賀県を代表する古墳群である。大型の横穴式石室を持つ古墳が6世紀後半から7世紀中頃まで連綿と営まれ、かつて古墳から持ち出されたとみられる竜山石製の石棺材が周辺に複数確認されている。その被葬者集団については、文献史料から当地域を本拠としていたとされる渡来系の依知秦氏が指摘されてきたところである（細川 2007）。

今年度の文化遺産学フィールド実習では、事前に勝堂古墳群の既往の調査や地誌の記述について確認をおこなった上で、現地において勝堂古墳群や付近の正眼寺・瑞正寺に所在する石棺材を実見し、勝堂古墳群の保存管理の現状に関する聞き取り調査などもおこなった。本稿は、その調査の成果を取りまとめ、報告するものである。（藤川聖起）

### 2. 勝堂古墳群の概要

#### (1) 勝堂古墳群の現状

勝堂古墳群は淵川流域に築造された骨塚古墳、朝日塚古墳（山上塚古墳）、行者塚古墳、おから山古墳、赤塚古墳、弁天塚古墳、（推定築造期順）の6基からなる。これらのうち骨塚古墳については、淵川からかなり離れており（図1）、近世に勝堂村という区分けが誕生した結果、勝堂古墳群に加えられたと考えられている（細川 2007）。よって本稿では骨塚古墳以外の5基をまとめて「勝堂古墳群」と呼称する。以下、（細川 2007）を参考に勝堂古墳群の現状を述べる。

朝日塚古墳は直径20m、高さ6.5mの円墳である。墳丘の半分以上は破壊されており、埋葬施設の詳細は不明だが、朱彩された横穴式石室を有する。勝堂古墳群においてはいずれの古墳でも発掘調査はおこなわれていないが、朝日塚古墳においては1954年の道路工事の際、TK43型式期の須恵器が複数出土している。このことから6世紀後半に築造されたと考えられている。



図1 勝堂古墳群分布図  
（細川 2007 に一部加筆）

行者塚古墳は、一辺 23m、高さ 5.3m の古墳である。墳頂は現在、平坦な方形を呈しているが、これは近世になって墳頂部に行者堂が建立されたことや、道路敷設に伴う裾部の削平による<sup>1)</sup>もので、築造当初は円墳であった可能性が高い<sup>2)</sup>。玄室幅 1.9m、長 4.4m、現高 2.6m の右片袖式横穴式石室を有する。石室構造から、築造時期は 6 世紀後半とされる。

おから山古墳は、直径 30m、高さ約 7m の円墳である。築造当初は直径 40m 以上であったとの指摘もあるが、現地調査をした結果、それほど改変を受けていないと思われるため、直径の復元には検討の余地がある。玄室幅 2.1m、長 4.4m、高 1.8m の両袖式横穴式石室を有する。石室構造から、7 世紀前半に築造されたと考えられている。

赤塚古墳は直径 32m、高さ 5.2m の円墳である。玄室幅 2.3m、長 3.8m、高約 3m の両袖式横穴式石室を有する。石室構造から、7 世紀前半に築造されたと考えられている。

弁天塚古墳は、直径 20m、高さ 4.3m の円墳である。古墳群で唯一周堤と周濠を持ち、それらを含めると、見かけの墳丘規模は直径 60m になる。

なお、勝堂古墳群近辺の正眼寺と瑞正寺には竜山石製組合式石棺の部材が確認されており、勝堂古墳群との関係が指摘されている。(横白彩江)

## (2) 地誌から見た勝堂古墳群

『近江國輿地志略』(以下、『志略』)と『近江愛智郡志』(以下、『郡志』)の2つの地誌に、勝堂古墳群の記述がある。

『志略』は、享保 8 年(1723)から享保 19 年(1734)に膳所藩士の寒川辰清が、藩主の本多康敏の命により編纂した地誌である。卷之七十二の愛智郡勝堂村の項に「岩窟」の条があり、村内には大石によって造られた岩窟が 48 カ所あると記述される。岩窟は石室を意味し、当時すでに多くの古墳で石室やその入り口が露出していたと考えられる。ただし岩窟は上古の民の穴居とされ、当時は墓とは認識されていなかったことがわかる。また、地域の住民が年々これを壊しているとあり、江戸時代中期には既に古墳の破壊が始まっていたと考えられる。

『郡志』は昭和 4 年(1929)に愛智郡に設置された愛智郡教育会が発行した郡内の地誌である。大正 14 年(1925)に中川泉三氏に委嘱して編纂が始まった。その中には勝堂古墳群について詳細な記述が認められる。『志略』などの記述から、江戸時代中期には 48 基の古墳があったとしているが、当時残存していた古墳は 8 基とし、40 基は明治以前に破壊されたと推測している。また、古墳の所在地や土地所有者についての記述があるが、うち万来塚・狐塚の 2 基については所在地が小字までしか記載されておらず、正確な場所が確認できない。この 2 基については現存しないとされている(細川 2007)。郡内の古墳の被葬者に関して、愛智郡では依知秦公の子孫が代々郡司を務めていたことから依知秦氏を有勢の氏族としているが、蚊野氏や我孫子氏といった氏族についても古墳と関係があるとしている。

赤塚古墳について、墳丘が崩れて元の形を知るの難しいとしつつ、前方後円墳ではないかと評価している。勝堂古墳群の古墳は、墳丘の土が崩れ、墳丘が元の形を留めないものが多いが、昭和初期にはすでに墳丘の崩壊が始まっていたことがわかる。また赤塚古墳は詳細な石室の実測図が掲載されている。現地調査において羨道が破壊されていることを確認したが、『郡志』内の「羨道石と玄室の右壁の半ばとは瑞正寺鐘堂の石垣と忠魂碑の石垣に搬用されて完形を留めず」との記述と一致する。(大倉響稀)

### 3. 正眼寺、瑞正寺の石棺材について

勝堂古墳群の近隣に位置する（図1）正眼寺所在の石棺材2点（図2・3）と、瑞正寺所在の石棺材1点（図4）を実見した。

#### （1）石棺材①

正眼寺に所在する石棺材である（図2）。現在は、立てられた状態で庭石に転用されている。短側辺に1個、長側辺に2個ずつ縄掛突起を持つ、竜山石製家形石棺の蓋石と考えられる。縄掛突起がほとんど退化していること、上部平坦面が広いこと、厚さが薄いことから7世紀前半頃の石棺と考えられる。わずかに石棺内面の端部が盛り上がるため、有溝技法（図5）のものである可能性が高い。

石棺材①の石棺の製造時期と赤塚古墳の築造時期がともに7世紀前半頃と考えられることから、この石棺は赤塚古墳に用いられていたという説もあるが（細川 2007）、正眼寺は淵川右岸に位置する赤塚古墳とは距離がある（図1）点が懸念される。石棺材①が行者塚古墳や朝日塚古墳、おから山古墳など、より正眼寺に近い古墳で追葬棺として用いられた可能性も考えられるが、勝堂古墳群ではいずれの古墳においても発掘調査がなされておらず、追葬時期を確認する術がないため現段階でこの点について論考することは難しい。

#### （2）石棺材②

正眼寺に所在する石棺材である（図3）。石棺材①と同じく、立てられた状態で庭石に転用されている。竜山石製組合式石棺の底石であると考えられる。石棺材①と石棺材②はほぼ同じ大きさであることから同一石棺の石材である可能性が考えられるが、今回の調査で計測できたのは石棺材②のみであったため、今後の課題としておく。内面の短辺・長辺とも段状に加工されており、有段技法（図5）である。現状での上部の厚さが約10cm、下部の厚さが約13cmであり、下部に近づくにつれ厚くなることがわかる。



図2 石棺材①（正眼寺）



図3 石棺材②（正眼寺）

### (3) 石棺材③

瑞正寺に所在する石棺材（図4）である。寺内の墓地の隅に横置きされているが、以前は墓の敷石として使われていたという<sup>3)</sup>。竜山石製組合式石棺の底石と考えられる。厚さは約16.5cmで、石棺材②よりも厚いことがわかった。よって、石棺材②と石棺材③はともに組合式石棺の底石ではあるものの、明らかに異なる石棺の底石であり、勝堂古墳群周辺では少なくとも二つの竜山石製組合式石棺が使用されていたと考えられる。一方の短辺が長辺に対して直行していないことから、この石材は後世になって切断された可能性が高い。短辺の断面を見た際、粗く加工したような跡を確認することができた。（横白）



図4 石棺材③（瑞正寺）

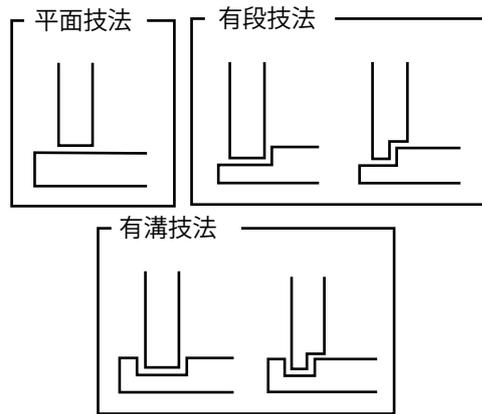


図5 組合式石棺の結合方法  
（和田 1976 をもとに作成）

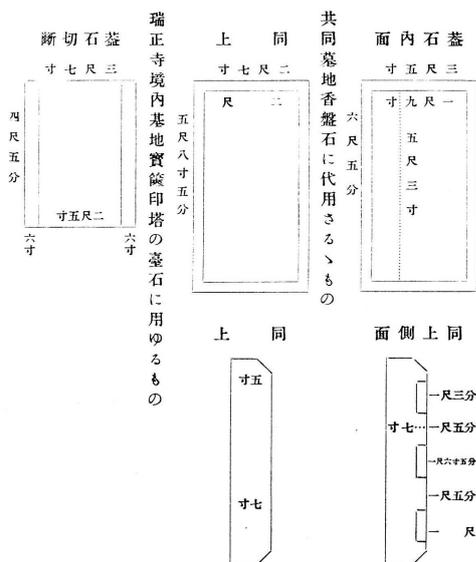


図6 『郡志』記載の石棺材実測図

### (4) 地誌の記述との比較

『郡志』では、正眼寺境内・共同墓地・瑞正寺境内の3か所に石棺の蓋石が存在するとし、実測図を記載している（図6）。それらは上述の石棺材①～③であると考えられる。共同墓地は村内の墓地のいずれかを指すと考えられるが、村内のいずれの墓地にあたるのか確認できていない。そこに存在した石棺は、『郡志』の図にある寸法が幅2尺7寸（81.8cm）で石棺材②とほとんど一致しており、形状も四周に段状加工を施すなど石棺材②と一致する。このことから、共同墓地にあった石棺材②が正眼寺に移動したのと考えられる。また、『郡志』ではすべて蓋材とされるが、上述の通り、石棺材①以外は底石の可能性が高いと考えられる。（大倉）

## 4. 現代の勝堂古墳群

### (1) 文化遺産としての勝堂古墳群

勝堂古墳群は、圃場整備によってその価値が再確認され、以後史跡としての整備が進んだ。赤塚古墳・弁天塚古墳は1983年に滋賀県史跡に指定され、行者塚古墳・おから山古墳も2013年に滋賀県史跡に追加指定された。また、朝日塚古墳の出土品が2012年に東近江市指定文化財に、正眼寺に所在する石棺材2点が2013年に滋賀県指定文化財に指定された（東近江市教育委員会2018）。

それらのうち弁天塚古墳は周提を持つ古墳であったが、現地において古墳の周堤が復元され、古墳の墳丘を区画するように石が並べられている。行者塚古墳には近世のものとされる行者堂の遺構が残されている。また、弁天塚・行者塚・おから山古墳については階段が設置され、墳丘に登ることができる。

### (2) 勝堂古墳群の保存・活用に関する現状と課題

勝堂古墳群を文化遺産として保存・活用する上では、課題も多くある。今回の調査では、「勝堂里やまをよくする会」会長の廣田茂氏に、主におから山古墳の現状について聞き取り調査をおこなった（図7）。

おから山古墳は、もともとは東近江市が管理し地元の自治会が市の依頼により墳丘の草刈りなどに取り組んでいたが、急斜面での作業が危険であり怪我人も出たことなどから、現在自治会は関与していない。しかし、「勝堂里やまをよくする会」のメンバーは現在6人、実質的に活動しているのは3人にとどまる。墳丘の草刈りは義務にしなければ参加する住民がいないとのお話があった。人手の確保と住民の参加意識向上が課題となっている。

また、おから山古墳は自由に登ることができるが墳丘は急斜面であるため、来訪者がけがをした際の責任の所在が課題となり、現在は注意喚起のための看板を設置している（図8）。子供たちが登って遊ぶことができるような場所になることを目指して整備がおこなわれており、土留めのために丸太を設置したり、ツツジの植樹をおこなったりといった工夫がされている。

以上のようにおから山古墳では整備・保護のための取り組みがおこなわれているが、住民の文化遺産の保護への参加意識が課題となっている。勝堂古墳群の古墳は墳丘の土が崩れている



図7 聞き取り調査風景（正眼寺境内）



図8 おから山古墳注意喚起の看板

ものも多く、行者塚古墳については方墳に見える程に墳丘が崩れてしまっている。さらなる墳丘の崩落を防ぐため、何かしら保護が必要である。勝堂古墳群は地域の歴史を考えるうえで重要な文化遺産の一つであり、地域全体でその価値を確認し次世代に伝えていくことが重要となる。

(大倉)

## 5. おわりに

現地調査から勝堂古墳群にともなう少なくとも2基の竜山石製石棺について、過去の地誌との比較や聞き取りを通じて、石棺材の移動についての新知見を得た。

一方、勝堂古墳群の保存・活用の現状を知ることにより、課題が浮き彫りとなった。勝堂古墳群の恒久的保存のためにも、地域の方々に勝堂古墳群の文化遺産としての価値を認識してもらい取り組みが今後望まれる。

なお、正眼寺所在の石棺材②については、今回の調査において SfM/MVS による三次元計測をおこなっている。この成果や正眼寺・瑞正寺に所在する石棺材の価値づけについては、改めて報告の機会を持ちたい。

(藤川)

## 註

- 1) 勝堂町里やまをよくする会の廣田茂氏のご教示による。
- 2) 東近江市文化スポーツ部歴史文化振興課の嶋田直人氏のご教示による。
- 3) 滋賀県平和祈念館専門員の北原治氏のご教示による。

## 謝辞

調査において、勝堂町里やまをよくする会の廣田茂氏、東近江市文化スポーツ部歴史文化振興課の嶋田直人氏、滋賀県平和祈念館専門員の北原治氏にはたいへん貴重なお話を聞くことができた。記して感謝したい。

## 参考文献

- 芦田伊人編 1929『近江國輿地志略 上巻』(大日本地誌体系 222) 雄山閣
- 愛知川町史編纂委員会編 2005『近江 愛知川町の歴史』第1巻(古代・中世編) 愛知川町
- 滋賀県愛智郡教育会 1929『近江愛智郡志』巻一 滋賀県愛智郡教育会
- 東近江市教育委員会 2018『東近江市の遺跡シリーズ 4 勝堂古墳群』東近江市教育委員会
- 細川修平 2007「勝堂古墳群の造営」『近江文化財論叢 第二輯』近江文化財論叢刊行会
- 和田晴吾 1976「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号 史学研究会